

をしどり

陸奥の國、田村の郷の住人、村允そんじょうと云ふ鷹使でありかつ獵師である男がゐた。或日獵に出たが鳥を得ないで空しく歸つた。その途中赤沼と云ふ所をしどりが一つがひ泳いで居るのを見た。をしどりを殺すのは感心しないが、飢ゑてゐたので、村允はその一つがひを目がけて矢を放つた。矢は雄鳥を貫いた。雌鳥は向うの岸の蘆の中に逃げて見えなくなつた。村允は鳥の屍を家に持ち歸つてそれを料理した。

その晩村允はものすごい夢を見た。美しい女が部屋に入つて来て、枕元に立つて泣き出すやうな夢であつた。餘りはげしく泣くので聽いて居ると胸が裂けるやうであつた。女は叫んだ。『何故あゝ何故夫を殺しました。殺されるやうな、どんな罪を犯しましたか。赤沼で私共は楽しく暮してゐたのです。——それにあなたは夫を殺しました。……あなたに一體、何の害をしたでせうか。自分で何をしたか。あなたは分つてゐますか。——あゝ、どんな残酷な、どんな悪い事をしたか、分つてゐますか。……あなたは私も殺しました。——夫がゐないでは私は生きて居る氣はない。……私はただこの事を言ひに来ました』……それから又、大聲で泣き出した——餘りはげしく泣いたので、その泣き聲が村允の骨の髓までしみ渡つた、——それからつぎの歌を、泣き泣きよんだ、——

『日暮るれば さそひしものを、  
あかぬまの』

眞菰がくれの ひとりねぞうき』

この歌の文句を吐き出したあとで、彼女は叫んだ、——

『あゝ、あなたは知らない——何をしたか分る譯はない。しかし明日赤沼へ行けば分ります——分ります……』さう云つて又悲しさに泣いて歸つた。

朝、目がさめた時、この夢が心にはつきり残つてゐたので村允は甚だ困つた。

『しかし明日赤沼へ行けば分ります——分ります』と云ふ言葉は、彼にとつて忘れられなかつた。

そこで彼は、その夢は、夢以上のものであるか、どうかをたしかめるために、直ちにそこへ行かうと決心した。

そこで彼は赤沼へ行つた。岸についた時、見ると雌鳥がひとりで泳いでゐた。同時にその鳥が村允を認めた。しかし逃げようとししないで不思議な風に、わき目もふらずに村允を見つめながら、眞直にその方に向つて泳いで來た。それからくちばしで、不意に自分の體をつき破つて村允の目の前で死んだ。……

村允は頭を剃つて、僧となつた、

(田部隆次譯)

*Oshidori. (Awaidan.)*